

非認知能力について 汐見先生へのインタビュー記事より

前回紹介しました非認知能力について、今回は東大名誉教授、汐見稔幸先生への小学館さんによるインタビュー記事(2018年)の内容を紹介します(一部抜粋)。ご家庭での参考にしていただければ幸いです。



汐見氏

○非認知能力は、幼いほど身につけやすいというのはなぜ？

脳の発達と関係しているからでしょう。この能力は脳の奥にある大脳辺縁系や脳幹部と関連しています。生命維持や危険の察知、安心感、好き嫌いななどの感覚をつかさどる部分で、およそ5歳ごろに原型が完成するようです。0～3歳ごろはこの脳を委縮させず、安定して発達させる大事な年齢です。しかもこの脳は成長とともに認知能力を担当する前頭連合野とつながります。つまり「認知能力を高めるには、まず非認知能力から」なんですよ。

○親ができることは？

無条件の愛を与えてあげること。

無条件で愛されている、いつだって助けてくれるという基本的な信頼感と安心感を育てることです。子どもが泣いたり呼びかけたりしたら、いつも温かく応える。失敗したら頭ごなしに怒らず「大丈夫だよ」と励ます。不安そうなときは寄り添う。そんなかわりを心がけてほしいですね。その積み重ねで安心感や信頼感が根付くと、「ありのままでもいいんだ」という自己肯定感が生まれ、「がんばってみよう」という前向きな力になるわけです。この安心感と、親に見守られてやりたいことをやる中で、非認知能力の基礎ができていきます。

子どもの好奇心を尊重！やりたがることをやらせよう。

1歳になるころから、子どもは周りの世界に興味をもち探索を始めます。トイレットペーパーを引っ張り出す、塀の穴に指を突っ込む、障子紙を破る、引き出しの物を出す、水道の水で遊ぶなどいろいろやりますが、原則やらせてあげましょう。

○大人の目には無駄な活動に見えることも？

いやいや逆です。探索に限らず、好奇心から始まる自発的な活動を通して、多様に学んでいるのです。非認知能力が高く、発想力のある4、5歳児を調べてみたところ、0～2歳時代に全員が自由な探索活動を保障されていたという報告もあります。親は遊んであげるものではないのです。親子で遊ぶのは良いことです。絵本を読んであげるのも良い影響があります。ただ、子どもが自発的にやっていることは、邪魔しないのが大事です。

○親として持つべき心がけは？

「うちの子は何を見ているのかしら、どんなことが好きなのかしら」と関心を寄せて、理解すること。何かやっていたら、口出ししないで「ここにいるよ。あなたがそうやっている姿が好きなのよ」という気持ちで見守ってほしいですね。現代のお母さんは本当に大変です。ひとりで抱え込まないで、お母さん自身のためにも子どもの未来のためにも、子どもを預けたりしてストレスを解消してゆとりをもつことが必要だと思います。

○非認知能力は特別なことをしなくても育まれる？

実は非認知能力は、少し前までの不便な暮らしの中では身につけやすかったんです。機械がないから自分で工夫する、隣近所と助け合っつき合う、子ども同士で自然の中や町内を遊びまわる…そんな環境があったからです。

現代は子育てがとても窮屈なものになってしまいました。もっと肩の力を抜いて子どもをゆったり見守れるといいですね。子どもがやることを「おもしろいなあ」と楽しめたら、それが未来を救う知恵を育むことにつながっていきます。

※園でも汐見先生の考えを参考に、教育・保育活動を展開していきたいと思ひます。